

# フランス語の口蓋化とその時期について

Naissance et chronologie des consonnes palatales dans l'histoire du français

矢 島 猷 三

Yuzo YAJIMA

この小論は日本ロマンス語学会第27回大会での口頭発表「フランス語における口蓋化と動詞語幹の形成について」の前半部分を整理し、これに加筆したものである。

ここで用いた表記法の主なものは以下の如くである。

l	口蓋(化)音	ê = [tʃ]
t <sup>1</sup>	前よりの t, s を生じる	e = [ʃ]
t <sup>2</sup>	後よりの t, s を生じる	j = [dʒ]
t'	半口蓋化音	j = [ʒ]
(d = d <sup>2</sup> , j を生じる		é = [e]
š = [ts]		è = [ɛ]
ž = [dz]		a 強勢母音

1. いわゆる俗ラテン語期からフランス語が形成されるまでの間に、口蓋化によって生じる口蓋(化)音の種類は k, g, t<sup>1</sup>, t<sup>2</sup>, d, l, n, ç, y, および š, é, j である。そしてこれらの音の間には、k > t<sup>1</sup> > š, k > t<sup>2</sup> > é, g > d > j, l > y, ç > y という変化の組み合わせが見られる。

口蓋化の結果生じるのは上記の音のみではない。s', s's', z', r', t', および š', ž' と表記しうる半口蓋化音がある。この音が生じる場合には常に「わたり母音」の i を伴うことになるので、s' > i s', i z'; s's' > i s's', r' > i r', そして t' は > i t' > i š', i ž' と変化する。

上記の(半)口蓋(化)音が生じたのは、主として俗ラテン語期、またはロマンス諸語形成期のことで、紀元後の比較的早い時期のできごとと推定されている。842年の *Serments de Strasbourg* に始まる文証フランス語の歴史から見れば遙か以前の変化であり、古期フランス語に先立つ数世紀を仮に原フランス語(Proto-français)の時代と名付けるとしても、<sup>(1)</sup> 口蓋化の現象は既にすべてこの時期までには終わってしまっているものと考えられる。口蓋化はそれ以前の、Romania の分化と密接に関わる時期の現象であり、それ以後の歴史は一旦生じた口蓋音が別種の音に変わる非口蓋化(dépalatalisation)の歴史といえることができる。

口蓋化は、口蓋音を生じるという結果においては同じであっても、それが生み出されるまでの過程の違いにより、真の口蓋化(vraie palatalisation)と見せかけの口蓋化 fausse palatalisation)に分けられる。真の口蓋化は口蓋音を作り出すに際して、1) 調音の位置の硬口蓋への移動、2) 調音エネルギーの増大に伴う舌背中央部の持ち上り、の二つの条件の双方を満たすものであり、見せかけの口蓋化は、これらのうちいずれか一方しか満た

さないものである。即ち硬口蓋への移動のみ (REGĒ>reye), または舌背中央部の持ち上りのみ (y>d) によって生じるものである。<sup>[2]</sup>

1.1. 真の口蓋化に属する変化は以下のものである。

! を生じるもの。

母音間の -kl->! (SOLĪC(U)Lu>solé!u>solé!.

母音間の -gl->! (RĒĠ(U)LA>ré!a>ré!e).

ly>! (PALĒA>pa!ya>pa!a>pa!e).

ŋ を生じるもの。

母音間の -gn->ŋ (SĪGNU>ségnu>sénu).

ny>ŋ (MONTĀNEA>montānya>montāna>montāne).

k を生じるもの。

ky>k>t'<sup>1</sup>>š>š̄ (FĀCIA>fākya>fāka>fať'a>faša>faše).

語頭または子音の後の k<sup>e,1</sup>>k>t'<sup>1</sup>>š>š̄ (CAĒLU>kèlu>t'èlu>šèlu>šjèlu>šjèl).

母音間の -k<sup>e,1</sup>>k>t'<sup>1</sup>>it'>is'>jž'>jž̄ (PLACĒRE>plakère>plat'ère>plajt'ère>plajš'ère>plajž'ère>plajž'jère>plajžjère>plajžjir); または >jš̄(PLACĒT>plaket>plajt'et>plajš'et>plajž'et>plajž'jēt>plajžjēt).

語頭または子音の前の k<sup>a</sup>>k>t'<sup>2</sup>>ê>ê̄ (CARBĒNE>karbône>t'<sup>2</sup>arbône>êarbône>êarbône>êarbôn>êarbón).

g を生じるもの。

語頭または子音の後の g<sup>e,1</sup>>g>d>j>j̄ (ARGĒNTU>argentu>ardentu>arjentu>arjent).

語頭または子音の後の g<sup>a</sup>>g>d>j>j̄ (GĀMBA>gamba>damba>jamba>jambe).

t' を生じるもの。

ty>t'>it'>is'>jž' (RATIĒNE>ratyōne>rat'ōne>rajt'ōne>rais'ōne>rajž'ōne>rajž'ōune>rajžōun>rajžōn) または > is' (PALĀTIU>palatyu>palat'u>palajt'u>palajš'u>palajž'u>palajš).

s' を生じるもの

sy>s'>is'>jž'>jž̄ (MA(N)SĪĒNE>masyōne>mas'ōne>majš'ōne>majž'ōne>majž'ōune>majžōun>majžōn).

s's' を生じるもの。

ssy>s's'>js's'>js' (BASSIARE>bassyare>bas's'are>bajs's'are>bajs'are>bajs'aere>bajs'ière>baj-s'ier).

r' を生じるもの。

ry>r'>ir'>ir (PARIA>parya>par'a>pajr'a>pajre).

1.2. 見せかけの口蓋化に分類されるものは、以下の変化である。

1) yy を生じるもの(その1)(俗ラテン語期の母音間の yod は調音の強めから二重子音の yy と考えられる)。

母音間の -g<sup>e,i</sup>>yy>y (RĒGE>rēyye>rēye>rēy).

<sup>a,e,i</sup>k<sup>a</sup>>g>yy>y (BAKA>baga>bayya>bayye>baye).

<sup>a,e,i</sup>g<sup>a</sup>>yy>y (PLAGA>playya>playye>playe).

2) 母音 + k + 子音>X>ç>y (FACTU>faxtu>façtu>faytu>fayt).

1), 2) とともに調音位置の前方への移動のみによって yod を生じている。1) は母音間子音の有声音化 (sonorisation) および摩擦音化 (spirantisation) に属する変化としても扱われる。結果として口蓋音を生み出すところから、見せかけの口蓋化にも属することになる。また <sup>a,e,i</sup>k<sup>a</sup> と <sup>a,e,i</sup>g<sup>a</sup> は共に見せかけの口蓋化を生じるが、母音間の -k<sup>e,i</sup> と -g<sup>e,i</sup> は真と見せかけの双方に分かれる。<sup>[3]</sup>

3) yy を生じるもの(その2)

母音間の -dy->yy>y (\*SŪDIA>sūdyā>sūyyā>sūyyē>sūyē).

母音間の -gy->yy>y (EXAGIU>eksagyū>eksayyu>esayu>esay).

上記は同化作用によって yy を生じたものであるが、dy, gy の y に視点を置いて考えれば、調音の位置の移動を伴わずにその場で強められたものと言うことができる。次の二つの変化も、同様にその場の強めによるものである。

語頭の y>yy>d>j (JA(M)>ya>yya>da>ja).

語頭または子音のうしろの dy>yy>d>j ((H)ORDEU>ordyu>oryyu>orđu>orju>orje).

さらに唇子音に続く外破の位置の y の変化もこれに加えることができる。

4) tʰ を生じるもの。

py > pç > ptʰ > pɛ̃ > ê > ê (SAPIA(M) > sapya > sapça > saptʰa > sapêa > saêa > saêɛ).

5) d を生じるもの。

by > bq > bĵ > ĵ > j (RABIA > rabya > rabda > rabja > raja > rajɛ).

vy > vq > vĵ > j (CAVEA > kavya > kavda > kavja > kaja > kajɛ).

my > mq > nq > nĵ > nj (SIMIA > simya > simda > sinda > sinja > sinɛ).

1.3. 非口蓋化は口蓋化に引き続いて生じた現象である。その結果主として各種の破擦音が形成される。これは閉鎖子音の出わたり部分の持続部への侵蝕によって生まれるものであるが、調音エネルギーの強い時代には口蓋化とはほぼ時を同じくし、調音エネルギーの弱い時代には変化は比較的緩慢であったと考えられている。<sup>4)</sup> いずれにしても破擦音はまず口蓋化音として生み出され (š, ê etc), 次第に口蓋化の要素を失っていったものであろう (s, ê etc)。

この口蓋化要素がいつまで存続したかを定めるのは困難であるが、Bartsch の法則に示される変化によって、少なくともフランス語に特有の二重母音化 (diphthongaison française) の時期まで存在していたことは確かである。

即ち, CAPRA に見られる開音節のアクセントを受けた a は, MARE > mer の如く è を生じることなく, 中世に chievre として現われている。これは kapra > kabra > tʰavra > êavra > êaɛvrɛ のあと, 通常の aɛ > è を経ずに, この時期まで残存していた口蓋化要素の影響で aɛ > iaɛ > ièè > iè (êièvrɛ) と変化したためと考えられる。

同一の現象は前述の例 bajs'agre > bajs'ièrè においても見ることができ, また plaj'êire > plaj'iéire > plajzir が示すように, 開音節のアクセントを持つ é についても起りうる。

chievre の綴りはのちに chèvre となるが, これは同じ口蓋化破擦音が iè の i を吸収した結果であろう。他にも marchie > marché, congie > congé, bergier > berger, oreillier > oreiller 等の例がある。

口蓋化要素を失った破擦音は, さらに調音エネルギーの弱まりとともに摩擦音化する。上記の口蓋化の諸例は以下の如く, 摩擦音化の段階を経て現在に至る。

š > s

fāšɛ > fāsɛ > fas (face).

šîèl > sièl > sièl > syèl (ciel).

plajšt > plajst > plajt > plèt > plè (plait).

palajš > palajs > palè (palais).

ž>z

plajžir>plajzir>plèzir (plaisir).

rajžōn>rajzōn>rèzōn>rezō (raison).

ê>e

êarbōn>earbōn>earbō (charbon).

sāêç>saeç>sae (sache).

ĵ>j

arĵent>arĵēnt>arĵānt>arĵānt>arĵā (argent).

ĵambę>ĵāmbę>ĵāmbę>ĵāb (jambe).

ĵa>ja ((dé)jà).

orĵę>orĵę>orj (orge).

raĵę>raĵę>raj (rage).

kaĵę>kaĵę>kaj (cage).

sinĵę>sinĵę>sinĵę>sēnĵę>sēĵę>sēj (singe).

l>y も摩擦音の形成と同じく非口蓋化の一種である。これは舌背の緩みによって生じた現象であり、solé|>soléy (soleil), ré|ę>réyę (afr. reille), pa|ę>payę>pay (paille) となる。同様の变化は ŋ>in にも見られる: séŋu>séin>sēin>sēn>sē (seing)。

r'>r も非口蓋化の一種である。これは上記二つの場合とは異なり、半口蓋化した r' が元の r に再び後退したものである: pair'a>pairę>pèrę>pèr (paire)。s's'>s'>s, s'>z'>z の変化もこれに属する: baj's'are>baj's'ier>bajser>bèsé (baissér); majz'ōune>maizon>maizōn>mèzōn>mèzō (maison)。

見せかけの口蓋化の結果生じた yy はその後 y に弱まり、さらに母音 i となって直前の母音と結合し、二重母音を形成する。<sup>(5)</sup> 下記の如くである。

réy>rói>rói>ruè>rwè>rwa (roi)。

bayę>baję>bèę>bè (baie)。

playę>plaję>plèę>plè (plaie)。

suyę>suię>swię>swi (sue)。

esay>esaj>esè (essai)。

同様に

fayt>fajit>fèt>fè (fait)。

口蓋化の結果生じた口蓋(化)音のうち、閉鎖音 k, t<sup>1</sup>, t<sup>2</sup>, g, d, t' はその後の経過によって破擦音の系列 š, ž, ê, ĵ を生み、のちさらに摩擦音 s, z, e, j になる。口蓋(化)摩擦音の s' は s を、l は y を、y は i を生じることになる。口蓋閉鎖音の ŋ のみは一部を除いて変化を蒙ることなく、現在に至っている: montāņę>mōntāņę>mōtaņ (montagne)。

2. 以上の様々な口蓋化と見せかけの口蓋化の時期を、いつに求めればよいであろうか。ある綴が出現してそれが変化の証拠になると考えられる場合でも、その年代は必ずしも口蓋化の出現および伝播の時期と一致するわけではない。従ってこれに全面的に信を置くことはできない。これに対して言語変化の相対年代 *chronologie relative* に基づく推論法は、まず個々の変化の前後関係のつながりを求め、ついでそれを逆算して、問題の変化の生じた大よその時期を推定しようとするものである。前後関係の連鎖は、輪の一つに具体的な年代を与えることにより、また、ある変化が生まれて一般化するまでにはおよそ一世代を必要とする、即ち一つ一つの鎖の中は約三十年であると仮定することにより、絶対年代に結びつく。基準年代の設定、世代についての仮説は、ともに多くの問題をはらむが、今この考えに立脚して主な口蓋化の時期を推定すれば、次のようになる。

サルディニア語とルーマニア語は、ロマンス語の主要部分と早くから言語的に分離した点で特異な存在である。両者のロマニアの他の部分からの分離の時期が仮に想定できるとして、ある変化が他のロマンス諸語とともにこの両言語に共通に起きているとすれば、その変化は早い方の A 言語の分離以前のでき事であり、A には無く B にもみ生じている変化があるとすれば、それは A の分離以後と B の分離以前の中間の時期に起きた変化であり、他のロマンス諸語に生じていて AB のどちらにも見られない変化があるとすれば、それは B の分離以後に生じたものである。

ルーマニア語の分離の時期は、言語外的な事実から正確な年が明らかである。紀元後 271 年に、Aurelianus 帝は勅令によって属州ダキアからのローマ軍の撤退を命じた。これは同時に、この時以後属州への入植の行われなくなったことを意味するものであり、ロマニアの他の部分との言語的紐帯の断絶を示すものである。一方サルディニアの孤立化の時期はダキアよりも古い時期のものとして一般に考えられているが、同じような明確な形で示されているわけではない。

サルディニア語の分岐は、アクセントのある開音節母音の二重母音化の相対年代から推定することができる。二重母音化をサルディニア語は示さず、ルーマニア語は  $\text{è} > \text{iè}$  の変化のみを持ち、 $\text{ò} > \text{uò}$  の変化を知らない。この事実は、二つの変化がダキアの分離をはさんでその前後に位置していることを意味する。 $\text{è} > \text{iè} / 271 \text{年} / \text{ò} > \text{uò}$  である。 $\text{è} > \text{iè}$  の時期は 271 年より前一代の間に一般化した変化と考えれば、およそ 3 世紀の前半に生じたものとする事ができる。サルディニアの分離はこれより前になるが、この言語が二重母音化を生じないのは、さらにその前段階の開音節にある強勢母音の長音化にも達していないからと考えられるので、ダキアの分離から数えれば二世代分を中にはさんだその前、2 世紀の末ぐらいのでき事と見当をつけることができよう。

口蓋化に関して、サルディニア語、ルーマニア語の双方に、共に生起している変化は次のものである： $\text{ky} > \text{k} > \text{t}^2$ ,  $\text{ty} > \text{t}'$  (fr. *it'*),  $\text{ly} > \text{l}$ ,  $\text{ny} > \text{n}$ ,  $\text{sy} > \text{s}'$  (fr. *is'*),  $\text{s}'\text{s}'\text{y} > \text{s}'\text{s}'$  (fr. *is's'*)。これらは上記により、いずれもサルディニア島の言語的孤立以前、つまり 2 世紀末以前に、生じたものである。この変化はいずれも *yod* を伴うが、これは口蓋化に先立って生じた *hiatus* の位置にある *i, e* の *yod* 化によるものである。これは恐らく紀元前からの変化であろう。後続の *yod* による口蓋化は、 $\text{ry} > \text{r}'$  を除き、口蓋化の歴史の中では最も古い。

$\text{ky}, \text{ty}$  の口蓋化は、文献上は 2 世紀の半ば頃から認められる。近接した発音が原因と考えられる綴の入れ替え (*terciae = tertiae*) や、新しい綴の使用 (*Crescentsianus = -tianus*) が観察される。いずれも変化が既に定着して普遍的なものとなっていたことを示すものと思われる。従って先ほどの 2 世紀末以前の範囲をさらに限定して、2 世紀中葉を  $\text{ky}, \text{ty}$  の口蓋化の時期とすることができよう。 $\text{ny}, \text{ly}, \text{sy}, \text{ssy}$  の変化の、古い時期の証拠は乏しいが、 $\text{ty}, \text{ky}$  と同じ頃の変化と考えてよいであろう。

サルディニア語には見られないがルーマニア語に起きている変化は、 $-\text{k}^0\text{!} > \text{k} > \text{t}^2$  (fr. *it'*)、語頭または子音の

後に位置する  $k^{e,i} > k > t^2$  (fr.  $t^1$ ), 同じ位置の  $g^{e,i} > g > d$ , そして  $-g^{e,i} > g > d$  (fr.  $yy$ ) である。いずれも 2 世紀末と 3 世紀末の間に置くことができる。

この時期は SOCIETATE (afr. *soistié*) の言語変化の連鎖からも推定することが可能である。この語は SOC(I)ETATE > soġetate > soġetate > soġ'etate > soġsetate と変化し、このあと \*soisdié のように母音間の -t- が有声音化していないところから、有声音化の前に  $\hat{s}$ -t 間の prétonique 母音の syncope を生じて、soġst̄ate に達したものと考えられる。即ち、①  $-k^{e,i} > k$ , ②  $k > t$ , ③  $t > it'$ , ④  $it' > i\hat{s}$ , ⑤  $\hat{s}$ -t 間の prétonique 母音の消失, ⑥ 有声音化, という chronologie relative を想定することができる。そして⑥の有声音化の時期を広く認められている 4 世紀末 (400 年頃) とすれば、溯って①の口蓋化はおよそ 3 世紀前半と算定できよう。サルディニアとダキアの分離の間に生じたと考えられる他の変化も、およそ同じ時期のものであろう。

北ガリアに独自の、みせかけの口蓋化  $a^{e,i}k^a$ ,  $a^{e,i}g^a$  の時期は, cacare, gaganem, Andecavis の変化を考察することによって得られる。まず CACARE > \*cheier (派生形 [cun] *ceie* の形で残る) と GAGANTEM > jaiant を比較してみると,  $k^a$  と  $g^a$  はいずれも yod を生じたものと考えられる。が yod の前に位置する語頭音節の中の a の変化が両者異っている。前者は  $a > e$  であるが、後者の a には変化が生じていない。母音間に yod を生じると (= yy) 閉音節が形成されることになるが、音節の開閉と、口蓋化音に後続する語頭の a の変化の間には、一般に次のような関係がある。1) a が開音節に位置する場合には  $a > e$  と弱まる (CABALLU > cheval)。2) 閉音節に位置する場合には a のままで変化しない (CARBONE > charbon)。⑥ GAGANTEM > jaiant は  $g^a$  が yy を生じた時に、即ち閉音節が形成された時に、語頭の a に変化が生じていなかった (つまり  $g^a$  の口蓋化によって  $\hat{j}e$  となっていなかった) ことを意味しており、時間的に  $g^a$  の fausse palatalisation が  $g^a$  の口蓋化に先んじていたことを示すものである。一方 CACARE > \*cheier は,  $k^a$  が yy を生じた時に、語頭の k が既に口蓋化を終って、 $ka > e\hat{e}$  となっていたことを示している。この場合は  $g^a$  の場合とは異なり、 $k^a$  の口蓋化が起きたあとで、はじめて  $k^a$  のみせかけの口蓋化が生じたことになる。平行的な変化である語頭の  $k^a$  の口蓋化と  $g^a$  の口蓋化が、同一の時期のものとして仮定すれば、以上述べたことから、①  $g^a > yy$ , ②  $k^a$ ,  $g^a > \hat{e}$ ,  $\hat{j}$ , ③  $k^a$  から生じた第二の  $g^a > yy$ , の順を想定しうることになる。

次に、地名 ANDECAVIS > ANDEGAVIS > Angiés の変化により、母音間の -k- の有声音化のあと d-g 間の prétonique e に syncope の生じたことと、その結果子音に直接後続することになった g が口蓋化を生じたこと、が想定できる (Adegavis > Andgavis > Andjîèvis)。これによって、有声音化が  $k^a$ ,  $g^a$  の口蓋化よりも前であることが明らかとなる。

以上の三つの語の変化を一連の chronologie に整理すれば以下の如くとなろう。①  $g^a > yy$ , ② 有声音化, ③ 語頭の  $k^a$ ,  $g^a$  の口蓋化, ④  $g^a$  (< $k^a$ >) > yy。なお②を①の前に置くことは、④を①に吸収してしまうことになるので不可能である。ここで有声音化を 4 世紀末とすれば、①は 4 世紀後半、③、④は 5 世紀以降の変化となる。

③の  $k^a$ ,  $g^a$  の年代は、次のような別の連鎖からも推定が可能である。①  $k^a$ ,  $g^a$  の口蓋化, ②  $au$  (二重母音) >  $\hat{u} > \hat{e}$ , ③  $-a-u$  (二音節,  $-agu$ ,  $-awu$  よりのもの) >  $-a\hat{u}$ , ④  $-a\hat{u}$  (< $-agu$ ,  $-owu$ >) >  $\hat{u}$ , ⑤ 開音節の強勢母音  $a > ae$ , ⑥ 口蓋子音のうしろの  $ae > ia\hat{e} > i\hat{e}$ 。⑥を基準点としてこれを 6 世紀半ばとすると、①は溯ること 5 世代、概ね 1 世紀半前のでき事となる。即ち 5 世紀のはじめとなる。これを認めるとすれば、 $g^a$  (< $k^a$ >) のみせかけの口蓋化は、同じ 5 世紀でも  $k^a$ ,  $g^a$  の口蓋化よりも一段階遅れて生じたことになる。

上に述べたことは次のように図示できよう。

真 の 口 蓋 化						
世 紀	1	2	3	4	5	6
Ly		<u>&gt;l</u>				
Ny		<u>&gt;n</u>				
Ky		<u>&gt;k&gt;t'</u> >ɕ				
Ty		<u>&gt;t'</u> >it'>is'			<u>&gt;iz'</u>	
Sy		<u>&gt;s'</u> >is'			<u>&gt;iz'</u>	
-K <sup>e,i</sup>		<u>&gt;k&gt;t'</u> >it'>is'			<u>&gt;iz'</u>	
K <sup>e,i</sup>		<u>&gt;k&gt;t'</u> >ɕ				
G <sup>e,i</sup>		<u>&gt;&gt;gd&gt;j</u>				
K <sup>a</sup>						<u>&gt;k&gt;t<sup>2</sup>&gt;ɕ</u>
G <sup>a</sup>						<u>&gt;g&gt;d&gt;j</u>

み せ か け の 口 蓋 化						
世 紀	1	2	3	4	5	6
-G <sup>e,i</sup>		<u>&gt;yy</u>				
-K <sup>a</sup>						<u>&gt;yy</u>
-G <sup>a</sup>						<u>&gt;yy</u>

注

- (1) F. de La Chaussée は 5世紀末から 9世紀までを protofrançais の時期としている (Introd. p. 187-188).
- (2) G. Straka, Tralili. III, 1, p. 135-139.
- (3) 母音間軟口蓋子音の有声音化と摩擦音化は次のように分類できる。
  - (i) <sup>a,e,i</sup>k<sup>a</sup>>g>yy (見せかけの口蓋化)
  - (ii) <sup>o,u</sup>k<sup>a</sup>>g> ゼロ (CARRUCA>karruga>ɕarrua (charrue)).
  - (iii) 母音 + k<sup>e,i</sup>>k>t' (真の口蓋化)。
  - (iv) <sup>a,e,i</sup>k<sup>o,u</sup>>g> ゼロ (SECURU>seguru>seuro (sûr)).
  - (v) <sup>o,u</sup>k<sup>o,u</sup>>g> ゼロ (FOCU>fuòku>fuògu>fuou (feu)).
  - (vi) <sup>a,e,i</sup>g<sup>a</sup>>yy (見せかけの口蓋化)。
  - (vii) <sup>o,u</sup>g<sup>a</sup>> ゼロ (RUGA>rua (rue)).
  - (viii) 母音 + g<sup>e,i</sup>>yy (見せかけの口蓋化)。
  - (ix) 母音 + g<sup>o,u</sup>> ゼロ (TĒGULA>téula (tuile)).
 即ち、真の口蓋化、および見せかけの口蓋化を生ずるものを除けば、到達点はすべてゼロになる。
- (4) G. Straka, id, p. 135.
- (5) これも舌の位置の低下によるものであるが、Straka は非口蓋音化に入れていない。
- (6) E. et J. Bourciez, Phon. fr., § 89. P. Fouché, Phon. hist. p. 448-449.



#### 参考書目

- E. Bourciez, *Eléments de linguistique romane*, Klincksieck, Paris, 5<sup>e</sup> éd. 1967.
- J. et E. Bourciez, *Phonétique française*, Klincksieck, Paris, 1967.
- P. Fouché, *Phonétique historique du français*, vol. II Les voyelles, 1969, vol. III Les consonnes, 1966, Klincksieck, Paris, 2<sup>e</sup> éd.
- M. Křepinský, *Romanica I*, Mémoires de la Société royale des Lettres et des Sciences de Bohême, 1952.
- F. de La Chaussée, *Initiation à la phonétique historique de l'ancien français*, Klincksieck, Paris, 1974.
- G. Straka, *La dislocation linguistique de la Romania et la formation des langues romanes à la lumière de la chronologie relative des changements phonétiques*, *Revue de linguistique romane* 20, 1956.
- G. Straka, *Evolution phonétique du latin au français sous l'effet de l'énergie et de la faiblesse articulaires*, *Travaux de linguistique et de littérature*, II, 1, Strasbourg, 1964.
- G. Straka, *Naissance et disparition des consonnes palatales dans l'évolution du latin au français*, *Travaux de linguistique et de littérature*, III, 1, Strasbourg, 1965.